

ISO 31030 で強化する海外渡航リスク管理

渡航リスク管理(Travel Risk Management)における組織的・体系的な仕組みが、実際にどのように被害の減少につながるのか？ ディスカッション型セッションを開催した。

(3月10日開催、「海外安全講演会」から抜粋)



講師

インターナショナル SOS ジャパン株式会社
リージョナルセキュリティディレクター ノースアジア

福間 芳朗 氏

安全配慮義務を果たすために

企業のモビリティはコロナ禍を経て急速に回復し、同時に地政学リスク、自然災害、サプライチェーン分断、サイバー脅威の重層化という現実と直面している。こうした環境下で安全配慮義務(Duty of Care)をいかに果たすかは、重要な経営課題である。

国際規格 ISO 31030 は、ISO 31000(リスクマネジメント)のフレームワークを、従業員のモビリティという特定領域に適用した渡航リスク管理(Travel Risk Management)の規格である。

本日のセッションでは、ISO 31030 のセルフアセスメントを活用し、3 フェーズ(i. 事前

準備、ii. 予防・対策(個人・組織)、iii. インシデント対応)に応じたテーマで、グループディスカッションと全体共有を行う。

その後、トラベルリスクマネジメントのあるべき姿の考察や具体的なイメージの把握と、ISO 31030 の意義についてまとめる。

通常は、危機管理コンサルタントという当社の事業特性上、リスク管理のアプローチを顧客の組織内につくり上げる支援をすることが多いが、その場合は、ISO 31030 のフレームワークを8つの大項目、27の小項目、57の質問に分解して、社内の体制と逐一照合する教科書的な手法を取る(図表1)。

(図表1) ISO 31030渡航リスク管理フレームワーク

8つの大項目、27の小項目、57の質問

ISO 31030をもとに、International SOSで再構成

| | | リード項目 | サブ項目数 | |
|-------|---|--|--|----|
| PLAN | 1 | リスク評価 Assess Risks | 出張・駐在先のリスクを評価する仕組みが説明可能な形で構築・仕組み化、運用されているか | 4 |
| | 2 | 戦略的に計画 Plan Strategically | 渡航の安全対策が、会社全体のルールや仕組みに組み込まれ、責任所在や運用の枠組みが組織的、体系的に構築・浸透・運用されているか | 4 |
| | 3 | 方針と手順 Policies & Procedures | 渡航に関する社内ルールや承認手続き、例外対応、緊急時対応が整備、浸透、運用されているか | 2 |
| DO | 4 | モビリティ管理 Manage Mobility | 滞在・宿泊先、移動手段、医療機関、保険、などの短期～長期モビリティに関する戦略と安全管理の仕組みが連携し、運用されているか | 4 |
| | 5 | コミュニケーション・教育・訓練 Communicate, Educate, Train | 渡航者・管理者・関係者に対してリスクの啓発や予防の危機対処について研修を行う仕組みが構築、運用されているか | 3 |
| | 6 | 追跡・モニター・通知 Track, Monitor, Inform | 必要時に従業員の所在地を確認し、リスク事象発生時に把握、通知、安否確認、連絡、支援できる仕組みが構築、運用されているか | 5 |
| | 7 | アドバイス・支援・避難 Advise, Assist, Evacuate | トラブル発生時に支援できる体制が構築、整備・運用されているか | 2 |
| CHECK | 8 | 管理・分析 Control & Analyse | プログラム運用が組織的・体系的にされるよう監査、検証、報告、改善の仕組みが構築、運用されているか | 3 |
| | | 8 | | 27 |

出所：講演資料から抜粋